

# 農作物生産情報 (令和8年7月)

## 気象

(令和8年6月25日 仙台管区気象台発表 東北地方1か月予報より)  
向こう1か月の天候は、平年と同様に曇りや雨の日が多くなる見込みである。  
平均気温は、高い確率50%である。  
降水量は、少ない確率が40%である。

## 水稲

高温時は地温を下げて根の機能を維持しよう！  
適正追肥で「おいしい米づくり」を進めよう！

### 1 生育状況（6月20日現在）

「まっしぐら」は、平年と比較して、草丈はかなり短く、茎数は並で、葉数はやや少なく、生育の進捗は平年並である。

「青天の霹靂」は、平年と比較して、草丈はかなり短く、茎数は大幅に少なく、葉数はやや少なく、生育の進捗は2日程度遅れている。

「はれわたり」は、平年と比較して、草丈はかなり短く、茎数はかなり多く、葉数はやや少なく、生育の進捗は1日程度遅れている。

今後、平年並または低い気温が予想されることから、生育はほぼ平年並と見込まれる。

### 2 水管理

#### (1) 分けつ盛期から穂首分化期（6月下旬～7月上旬）

1株当たり茎数を「まっしぐら」、「はれわたり」は20本程度、「青天の霹靂」は18本程度（栽植株数が70株/坪程度の場合）確保した水田では、晴天で高温（平均気温20℃以上）が続くような時は中干しを行う。

中干しには、窒素の過剰発現の抑制、草丈の伸びの抑制、根腐れ防止等の効果がある。中干しを行う場合は、田面に軽くひび割れが入る程度とし、排水不良の水田では2回くらい繰り返すと効果的である。ただし、生育が遅れている場合や低温が予想される場合は行わない。また、幼穂形成期までに必ず終える。

(2) 幼穂形成期から穂ばらみ期

	暖かい日	寒い日	備考
幼穂形成期 から10日間	水深10cm程度		○ <b>稲の吸水量が多く、低温や干ばつに弱い時期(幼穂形成期から穂ばらみ期)</b> ・気温の高低に関係なく水深10cmで10日間の「幼穂形成期深水かんがい」を実施する。 ・この時期の低温は、籾数の減少、籾殻の小型化、奇形籾の発生、障害不稔の原因になる。
穂ばらみ期	・水深4cm程度(浅水) ・時々水の入換え	15~20cm(深水)	○ <b>最も低温に弱い時期</b> ・平均気温20℃以下、最低気温17℃以下になると予想される場合は、可能な限り深水にして幼穂を保護する。 ・高温時は、4cm程度の浅水にし、時々水の入換えを行い、根の老化を防止する(この頃から根の機能が低下し始める)。

- 幼穂形成期：**
  - ・出穂前25日頃
  - ・主茎の幼穂長2mm頃
- 穂ばらみ期：**
  - ・出穂前11~20日頃
  - ・主茎の葉耳間長が-12から+4cm頃

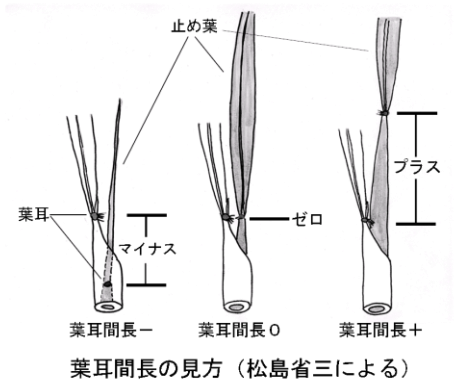


図-1 葉耳間長の見方

3 追肥

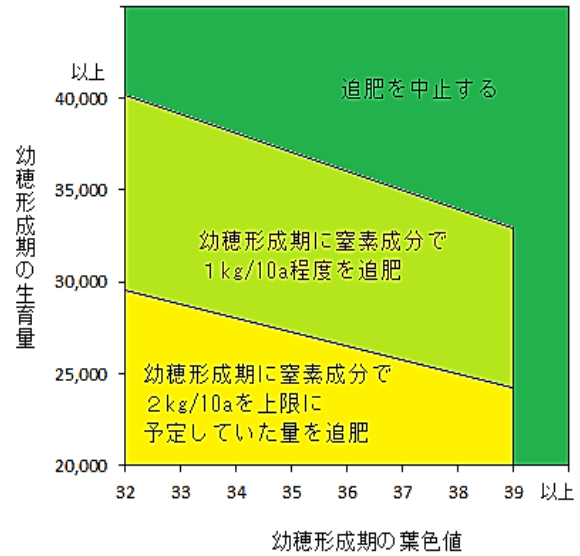
幼穂形成期に達し、肥料が切れて葉色が淡くなっていれば追肥の適期である。

「はれわたり」、「まっしぐら」は幼穂形成期後10日までに葉色が淡くなったことを確認できた場合は追肥を実施するが、「青天の霹靂」は幼穂形成期以降の追肥は行わない。適期外の追肥は玄米タンパク質含有率を高めて食味低下の原因となるため、「青天の霹靂追肥判断カラースケール」等を用いて、適切な追肥量を見極める。

	「はれわたり」「まっしぐら」	「青天の霹靂」
時期	・幼穂形成期になり、肥料が切れて葉色が淡くなったことを確認して実施する	・幼穂形成期に行い、 <b>それ以降は行わない。</b>
	幼穂形成期に追肥できなかった場合で、幼穂形成期後10日までに	
	葉色が淡くなった	葉色が濃いまま
	追肥する	追肥中止
量	窒素成分で2~3kg/10a程度	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「青天の霹靂追肥判断カラースケール」等を用いて、実際に生育調査を行った上で追肥の有無や追肥量を決める。</li> <li>・生育後半に土壤窒素の発現量が多い水田では追肥しない</li> </ul>	

■ 「青天の霹靂」の幼穂形成期における栄養診断基準

生育指標 (幼形期の草丈 × m <sup>2</sup> 当たり茎数 × 葉色値)	10a当たりの追肥対応 (窒素成分量)
95万未満	幼穂形成期に窒素成分で 2kg/10aを上限に 予定していた量を追肥
95万以上 ～ 129万未満	幼穂形成期に窒素成分で 1kg/10a程度を追肥
129万以上	追肥を中止する



注) 幼穂形成期の生育量は草丈×m<sup>2</sup>当たり茎数で算出、葉色値は葉緑素計で測定

#### 4 病害虫防除

##### (1) 斑点米カメムシ類

水田周辺の休耕田や畦畔・農道等の雑草地に生息しているので、雑草が開花・結実しないよう草刈りや耕起をこまめに行う。なお草刈りは出穂1週間前までに終了する。

水稻の出穂以降に草刈りをする必要がある場合は、斑点米カメムシ類に効果のある殺虫剤を水田に散布した後、速やかに行う。

ノビエ、シズイ、クログワイの多発田では、水稻の出穂前から斑点米カメムシ類が水田内に誘引され、斑点米率が高くなるので、除草や防除を徹底する。

##### (2) 葉いもち

葉いもちの初発生は、近年、6月末から7月上旬に確認されている。早期発見・早期防除が基本であり、発生状況に十分注意し、発生を確認したら直ちに防除を行う。

##### (3) 稲こうじ病

穂ばらみ期の低温や日照不足、多雨で発生しやすくなる。

土壌伝染性病害であるため、前年発生した水田では必ず防除を行う。

銅剤の効果が高く、防除適期は出穂20日前～10日前であり、防除時期が遅れると、防除効果の低下や薬害の恐れがあるので注意する。

## 畑 作

### ◆大 豆◆

中耕・培土をしっかりと行い、品質向上に努めよう！

#### 1 中耕・培土

中耕・培土は、①生育期の雑草防除、作土の膨軟化と通気性を改善する、②不定根の発生や根系の発達を促進し、倒伏防止や後期の養水分の吸収を高める、③通気性を良くすることで根粒菌の活動を助け、養分供給を高める、などの効果がある。

1回目は本葉2～3葉期に行い、初生葉のつけ根まで軽く土寄せする。2回目は本葉5～6葉期に行い、第1本葉のつけ根まで土寄せする。

最終培土は、開花10日位前（7月20日頃）に終える。培土の高さは、コンバイン収穫時に支障がない程度とする。

#### 2 除草

発生している雑草の種類、大きさ、大豆の生育状況に合わせて除草剤を効果的に使用する。

##### (1) イネ科選択性除草剤の茎葉散布

雑草が大きくなると効果が劣るので、各薬剤の使用時期の範囲内で使用する。

##### (2) 広葉適用除草剤の茎葉処理

広葉雑草に効果のある茎葉処理薬剤は大豆バサグラン液剤やアタックショット乳剤、パワーガイザー液剤がある。以下の注意点を確認のうえ使用する。また、薬剤により使用時期が異なるため注意する（パワーガイザー液剤は、一年生雑草に適用）。

薬剤	薬害の助長を防ぐための注意点
大豆バサグラン液剤	・高温時や大豆の生育が不良な場合は使用を避ける ・重複散布を避ける
アタックショット乳剤	・大豆の生育が不良な場合は使用を避ける ・重複散布を避ける ・他の茎葉処理剤（イネ科対象剤を含む）と混用しない
パワーガイザー液剤	・大豆本葉1葉期以降の処理は薬害程度が大きく、収量に影響はないが、生育量を抑制し、大豆による遮光効果が遅延する

##### (3) 畦間、株間処理

土壌処理、茎葉処理を行っても残草が多い場合は、畦間、株間処理除草剤が利用できる。薬剤の特性に合わせ効果的に利用する。

大豆に薬剤が付着すると薬害が発生するため、泡状ノズルやカバーで飛散しないよう散布する。

#### 3 追肥

子実を充実させるため、開花期前後に追肥する。追肥量は、窒素成分5～8kg/10aで

あるが、生育状態に応じて加減し、生育が旺盛な場合は行わない。

## ◆小麦◆

適期刈取りに努め、良品質小麦を確保しよう！

### 1 生育状況

県生育観測ほ（つがる市）の出穂期は平年より早く、「ネバリゴシ」は5月14日、「キタカミコムギ」は5月17日であった。

### 2 収穫作業

刈取適期は7月上旬からとなる見込みである。ほ場の成熟状況を確認し、収穫が遅れないようにする。「ネバリゴシ」は出穂後46～50日、出穂後積算気温830～950℃、「キタカミコムギ」は同様に51～55日、900～1,000℃が刈取適期であり、共に子実水分20～30%を目安とする。

「キタカミコムギ」は穂発芽しやすいので、天候次第では子実水分30%での刈取が必要になる。この場合は速やかに乾燥機に張り込み、水分25%までは送風温度を40℃以下にして品質低下を防ぐ。

### ■ 積算気温からみた刈取適期の目安

品種	ネバリゴシ		キタカミコムギ	
積算気温 出穂期	830℃	950℃	900℃	1,000℃
5月14日	6月30日	7月5日	7月3日	7月7日
5月17日	7月2日	7月7日	7月6日	7月9日
5月20日	7月5日	7月10日	7月8日	7月12日
5月23日	7月7日	7月12日	7月10日	7月14日

注) 積算気温は五所川原アメダスの日平均気温（6月18日以降は平年値）で算出。

# りんご

**結実状況に合わせて、早めに適果を！  
良果を見極め、仕上げ摘果に全力を！**

6月1日現在、県生育観測ほ（板柳町五幾形）のふじの果実肥大は、横径2.17cmで平年1.62cmを上回っている。

## 1 摘果の見直し

良品生産に向け、一通り仕上げ摘果を終了した園地では、再度園地を見回り、摘果の見落としがないか、障害果や小玉果等の品質不良果がないか点検する。なお、標準着果量が中心果で確保できない場合は、側果の中から形質の良い果実を残したり、障害の程度をよく見極めて障害の程度が軽い果実を残して、標準着果量を確保する。

## 2 袋かけ

ふじは、有袋にすることにより、つる割れの軽減や着色の向上、収穫期の分散ができるほか、販売戦略上も重要であるため、経営状況に配慮しながら、有袋栽培にも積極的に取り組み、7月10日頃までに袋かけ作業を終えるようにする。

また、すす斑病対策として、袋かけ前の薬剤散布が重要なので、果実にも十分薬液が付着するように留意し、散布後5日以上間隔が空く場合は、有効な薬剤で実洗いをしてから袋かけを行う。

## 3 マメコバチの巣箱の回収と管理

本年も前年同様、管内全域でマメコバチの数が少ない傾向があった。適切に管理し、マメコバチの増殖を促す。

マメコバチを天敵から守るため、巣箱は繭ができる7月上旬ごろに回収し、できる限り涼しい小屋の軒下などにまとめて保管する。この場合、ネズミの被害や雨水の跳ね返りを避けるため、地面からできるだけ離す。また、箱の積み重ねや雨よけにも配慮し、巣筒の内部が過湿にならないように注意する。

## 4 病虫害防除

7月以降の散布は15日間隔となるが、斑点落葉病やモモシクイガ、ハダニ類の増加期に入るので、発生動向に十分注意するとともに、散布予定日に降雨が予想される場合は、事前散布に徹する。

### ■ 薬剤散布（県りんご防除暦より抜粋）

時期と散布量	主な対象病虫害	基準薬剤
7月初め  (500 $\frac{1}{10}$ ／10a)	斑点落葉病	ピレスロイド剤
	ハダニ類 モモシクイガ キンモンホソガ	アントラコール顆粒水和剤 500倍 又はパスポート顆粒水和剤 1,000倍 又はオーソサイド水和剤 800倍

7月半ば (500 <sup>リットル</sup> /10a)	斑点落葉病、褐斑病 ハダニ類 モモシンクイガ リンゴコカクモンハマキ	アントラコール顆粒水和剤 500倍 又はパスポート顆粒水和剤 1,000倍 又はオーソサイド水和剤 800倍
7月末 (500 <sup>リットル</sup> /10a)	斑点落葉病 褐斑病 キンモンホソガ ハダニ類 モモシンクイガ	オーソサイド水和剤 800倍 又はアリエッティC水和剤 800倍 又はダイパワー水和剤 1,000倍

注) 殺虫剤、殺ダニ剤は発生に応じて加用する。

### (1) 腐らん病、褐斑病

本年も腐らん病の発生が見られている。

摘果後のつる（果柄）から侵入・感染するので、果台につるが残らないようにする。枝腐らんは、見つけ次第切り取り、適切に処分する。胴腐らんは、処置が不十分であったり、誤った処置が行われている園地もみられるので、再発病斑を含め、削り取り法か泥巻き法のいずれかの処置を適切に行う（下記QRコードより動画でそれぞれの治療方法を確認できる）。胴腐らんの発病が著しい樹は、伝染源になるので積極的に伐採し、速やかに園外へ搬出する。

粗皮感染による胴腐らんの発生が多い園地では、「7月半ば」又は「7月末」にトップジンM水和剤1,500倍又はベンレート水和剤3,000倍も使用する。



QRコード1：  
トップジンM  
オイルペースト



QRコード2：  
バッチレート



QRコード3：  
泥巻き法

### (2) 褐斑病

前年、果実病斑も発生した褐斑病は、散布ムラがある場所から発生が増加することが多い。散布ムラをなくすために散布量や散布ルートの見直しを行う。

また、感染拡大を防ぐため、自園地の状況をよく確認し、被害葉・果は見つけ次第摘み取り、適切に処分する。

感染が拡大しやすい「7月半ば」又は「7月末」にオンリーワンフロアブル2,000倍も使用する。

### (3) ハダニ類

発生動向を見極めながら適正な防除を行う。散布の目安は1葉当たり2個体以上あるいは寄生葉率50%以上である。殺ダニ剤は薬剤抵抗性が出やすいので、年2回以内使用のものでも年1回の使用とする。

ダニサラバフロアブル、スターマイトフロアブル、ダニコングフロアブルは合わせて年1回以内の使用とする。

■リンゴハダニとナミハダニに対する殺ダニ剤の適用表

薬剤名	倍数	使用時期	年間使用回数	リンゴハダニ	ナミハダニ
サンマイト水和剤	1,500倍	収穫21日前まで	1回	○	×
バロックフロアブル	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	○	×
カネマイトフロアブル	1,000倍	収穫7日前まで	1回	×	○
オマイト水和剤	750倍	収穫3日前まで	1回	○	×
コロマイト乳剤	1,000倍	収穫前日まで	1回	○	○
ダニサラバフロアブル	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	○	×
スターマイトフロアブル	2,000倍	収穫前日まで	1回	○	×
ダニコングフロアブル	2,000倍	収穫前日まで	1回	○	×
エコマイト顆粒水和剤	2,000倍	収穫前日まで	1回	○	×
ダニオーテフロアブル	2,000倍	収穫前日まで	1回	○	○

- ※1. サンマイトは落花直後に使用しない。  
 2. コロマイトは6月下旬までの使用を避ける。  
 3. オマイトは7月下旬までの使用を避ける。

#### (4) モモシンクイガ

無袋栽培では、毎回防除剤を散布する。

7月初めにピレスロイド剤（バイスロイドEW、イカズチWDG）を散布した場合でも、モモシンクイガやナシヒメシンクイの発生が見られている園地及び周辺に発生源がある園地では、7月半ばのシンクイムシ類防除薬剤を省略しない。

#### (5) リンゴコカクモンハマキ

第1世代又は第2世代幼虫の発生が多い園地では、フェロモントラップを利用して適期にサムコルフロアブル10の5,000倍、エクシレルSE5,000倍、テッパン液剤2,000倍、フェニックスフロアブル4,000倍、ヨーバルフロアブル10,000倍、ディアナWDG10,000倍、デリゲートWDG10,000倍のいずれかを散布する。

#### (6) クワコナカイガラムシ

発生の多い園地では、7月下旬と8月上旬に防除剤による胴木洗いを手散布で行う。また、6月下旬にバンド巻きをした園地では、7月中旬（卵のふ化前）に忘れずにバンドを除去し、適正に処分する。

### 5 ビターピット対策

ビターピットは、幼果期（6～7月）の少雨や夏期を中心とした生育期間の高温によって発生が多くなる。ビターピットの発生が懸念される場合は、カルシウム剤の果面散布を積極的に行う。

## ■ カルシウム剤の使い方

資材名	散布時期（散布間隔）	資材形状	倍数	散布回数
スイカル	6月上旬～9月中旬（10日以上）	粉状	300倍	3～5
セルバイン	6月上旬～9月上旬（10日以上）	粉状	400倍	3～5
アグリメイト	6月上旬～9月中旬（15日以上）	液状	500倍	5

注）樹勢の弱い樹や高温時、あるいは干ばつ時には葉害発生（葉縁褐変）の恐れがあるので避ける。

原則散布は単用で行う。

## 特産果樹

### ◆ぶどう◆

適期の房づくりで商品価値の高い果房に仕上げよう！

県生育観測ほのスチューベン（鶴田町境）の生育は、開花日が平年より7日早い6月11日、満開日は平年より7日早い6月14日であった。

7月は房づくりや病害虫防除などの作業を適期に行う。

#### 1 スチューベンの果房整形

開花前の6月中旬に岐肩を除去する。果粒が小豆粒大頃（果房中間の粒径が5mm程度の頃）に果房の先端を1cm程度切除するとともに、果房の長さが12～13cmになるように果房上部の支梗を切除する。さらに、果房の幅が6cm程度になるように長い支梗を切りつめる。

#### 2 摘房

新梢と果実との養分競合を少なくし品質向上と枝の充実を促すため、早めに行う。

着房数は実どまりの状態や結果枝の葉数を見ながら調整する。

スチューベン及びキャンベル・アーリーでは、中庸～強い結果枝には2房、やや弱い結果枝には1房着房させるように調整し、弱い結果枝には成らせない。

シャインマスカットでは、中庸～強い結果枝には1房着房させるように調整し、弱い結果枝には成らせない。

#### 3 摘粒

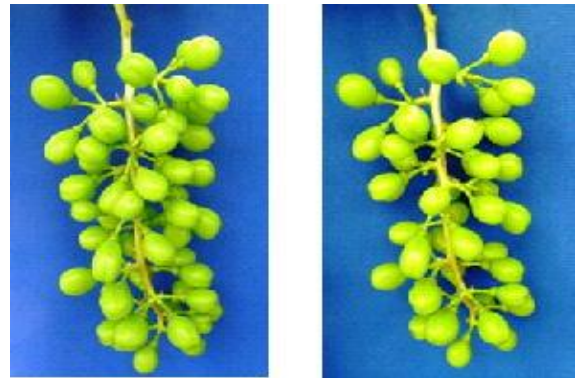
##### （1）摘粒の時期

果房形を整え、粒揃いや果粒肥大を促進するため、満開後15～25日頃（7月中旬）から始め、果粒軟化期前（8月上旬）までに終える。

シャインマスカットは、大豆粒大（7mm程度）頃までに終える。

(2) 着粒数の目安

品 種	着粒数
スチューベン	70～80
キャンベル・アーリー	50～60
シャインマスカット	35～40



摘粒前後の果房（シャインマスカット）  
（左：摘粒前、右：摘粒後）

(3) シャインマスカットの摘粒方法

小粒果やさび果などの障害果のほか、果粒が外向きに並ぶように内側の果粒を除去し、1房35～40粒程度に仕上げる。早すぎる摘粒は、収穫時に小粒未熟果が混入しやすくなるので留意する。

4 2回目以降の摘心

(1) スチューベン

2回目の摘心は、副梢の展葉枚数が8～9枚になった頃に行う。1回目の摘心後に伸びた副梢を5～6枚を残して、摘心する。摘心部位の先端の副々梢だけを残して、他はすべて摘除する。

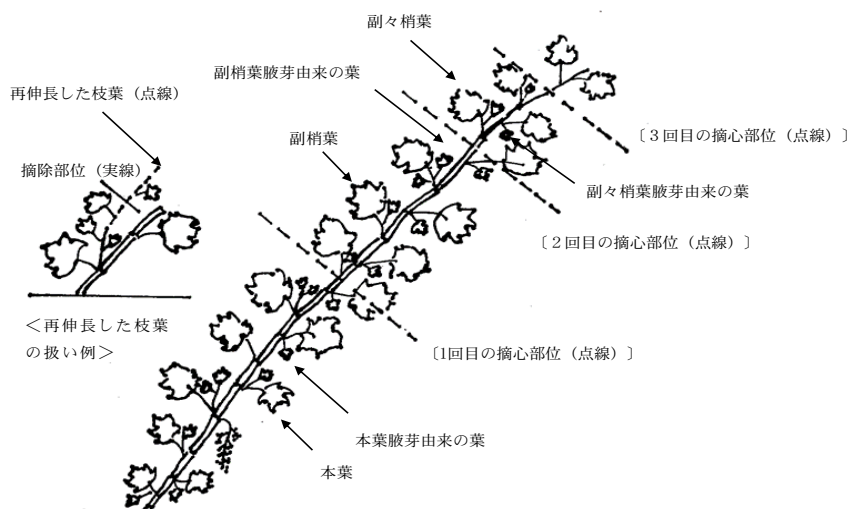
これ以降も副々梢が伸びる場合は3～5葉で摘心を行う。葉枚数を早めに確保することが着色期及び成熟期を早めることになるが、着色が始まる頃には葉枚数を20～25枚は確保する。着色後には、新梢の生育が僅かに伸長する程度が望ましいが、その後もかなり新梢が伸びる場合は随時摘心する。



2回目の摘心（6葉）  
スチューベンの摘心方法

(2) シャインマスカット

2回目の摘心は、副梢葉が8～9枚程度展葉した頃に5枚残して摘み取る。  
3回目の摘心は、副々梢葉が5枚程度展葉した頃に3枚残して摘み取る。  
本葉、副梢葉、副々梢葉の腋芽由来の葉と再伸長した枝葉は、いずれも随時（摘心～摘心3日後頃）1～2葉残し、結果枝当たりでは概ね35～40葉残す。



シャインマスカットの結果枝葉残し方の例

## 5 病害虫防除

### ■ 薬剤散布【農薬はぶどう園以外、ほかの作物、近隣の住宅等に飛散させない。】 〈スチューベン〉

散布 時期	薬剤名と倍数			
	殺菌剤		殺虫剤	
大豆粒大 (7月中旬頃)	ジマンダイセン水和剤	1,000倍	アグロスリン水和剤	2,000倍
	又はアミスター10フロアブル	1,000倍	又はアディオフロアブル	1,500倍
	又はストロビードライフロアブル	2,000倍	又はヨーバルフロアブル	5,000倍
	又はホライズンドライフロアブル	2,500倍	又はテッパン液剤	2,000倍
			又はスピノシン剤※	10,000倍

- 注) 1 大豆粒大以降、展着剤は使用しない。  
 2 晩腐病の発生が多い園地では、小豆粒大（7月上旬頃）にベンレート水和剤3,000倍を特別散布する。  
 3 ストロビルリン単剤のアミスター10フロアブル、ストロビードライフロアブル及び、同じ系統の混合剤であるホライズンドライフロアブルは、薬剤耐性の懸念があるので、合わせて年2回以内の使用とする。ただし、ストロビルリン単剤は年1回以内の使用とする。  
 4 ハダニ類の発生が多い園地ではマイトコーネフロアブル1,000倍又はカネマイトフロアブル1,000倍を特別散布する。  
 5 コガネムシ類の発生が7月下旬にみられる場合は、アグロスリン水和剤、アディオフロアブル、スミチオン水和剤40-800倍、ヨーバルフロアブル、テッパン液剤のいずれかを特別散布する。  
 6 ※スピノシン剤：ディアナWDG、デリゲートWDG

### 〈シャインマスカット〉

散布 時期	薬剤名と倍数			
	殺菌剤		殺虫剤	
大豆粒大 (7月中旬頃)	アミスター10フロアブル	1,000倍	アグロスリン水和剤	2,000倍
	又はストロビードライフロアブル	2,000倍	又はアディオフロアブル	1,500倍
	又はホライズンドライフロアブル	2,500倍	又はヨーバルフロアブル	5,000倍
			又はテッパン液剤	2,000倍

- 注) 1 大豆粒大以降、展着剤は使用しない。  
 2 灰色かび病対策のため、長期貯蔵向けでは、袋かけ前の7月下旬～8月上旬にフルーツセイバー1,500倍を特別散布する。フルーツセイバーは薬剤耐性発達の懸念があるので、年1回の使用にとどめる。  
 3 チャノキイロアザミウマの発生が懸念される園地では、大豆粒大（7月中旬）以降、袋かけ前まで10日間隔で散布する。7月下旬はアグロスリン水和剤、アディオフロアブル、ヨーバルフロアブル、テッパン液剤のいずれかを特別散布する。また、薬剤散布後、薬液が乾いてから速やかに袋かけを行う。  
 4 ハダニ類の発生が多い園地ではマイトコーネフロアブル1,000倍又はカネマイトフロアブル1,000倍を特別散布する。  
 5 コガネムシ類の発生が7月下旬にみられる場合は、アグロスリン水和剤、アディオフロアブル、スミチオン水和剤40、ヨーバルフロアブル、テッパン液剤のいずれかを特別散布する。  
 6 ストロビルリン単剤のアミスター10フロアブル、ストロビードライフロアブル及び、同じ系統の混合剤であるホライズンドライフロアブルは、薬剤耐性の懸念があるので、合わせて年2回以内の使用とする。ただし、ストロビルリン単剤は年1回以内の使用とする。

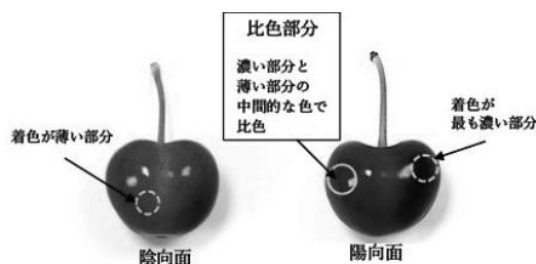
## ◆おとう◆

収穫適期を見極めてすぐりもぎを心がけよう！  
翌年度の生産を見据え、収穫後の防除を徹底しよう！

### 1 収穫（晩生種）

満開日からの日数を目安に（農作物生産情報令和8年6月号参照）、着色、大きさ、形状、食味などを重視して成熟したものから順次すぐりもぎを行う。また、灰星病やオウトウショウジョウバエ対策として、収穫前に有効な薬剤を特別散布する。

ジュノハートの収穫始めの目安は、「収穫適期判別カラーチャート（ジュノハート専用）」を利用し、満開55日後頃を収穫始めとして、着色指数5に達した果実からすぐりもぎをする。満開60日後頃（収穫最盛期）以降は、着色指数4～5の果実を収穫する。指数6に達した果実は過熟で日持ちが著しく劣り、流通には不向きなので即売用等に向ける。なお、果皮色を判定する際は、着色が中庸な部分（最も濃い部分と薄い部分の中間の色の部分）で行うようにする。栽培環境や年次により果皮色と果実品質が合致しない場合があるため、収穫にあたっては、必ず食味を確認するなど総合的に判断する。また、着色むらが大きい果実はこの条件は適合しない（平成29年度指導参考資料、平成31年度普及する技術参照）。



第11-63図 カラーチャートを利用した果皮色の判定イメージ

### 2 雨よけ被覆資材の除去

樹体に対する悪影響を避けるため、収穫後速やかに除去する。

### 3 施肥（礼肥）

樹勢維持と花芽分化促進のため、収穫後できるだけ早く施肥する。施用量は年間施用量の20%程度とする。

### 4 病虫害防除

#### ■ 薬剤散布（県おとう防除暦：佐藤錦の基準より抜粋）

散布時期	薬剤名と倍数		
	殺菌剤		殺虫剤
7月中～下旬 (収穫後)	オーソサイド水和剤	800倍	※ ハダニ類の発生に合わせて、殺ダニ剤を使用する。
	又はオキシラン水和剤	600倍	
	又はチウラム剤	500倍	

注) 褐色せん孔病（せん孔病）やハダニ類が発生すると早期に落葉し、次年産の花芽充実に影響するので、収穫後散布は必ず実施する。

## 野菜

高温対策を行い、草勢に応じた肥培管理と水管理で品質向上に努めよう！

### ◆トマト◆

#### 1 かん水と追肥

- (1) かん水と追肥の間隔は毎日～1日おきで実施する。
- (2) かん水は、水分要求量の高まる直前の午前8～10時頃に行う。
- (3) かん水量は1株当たり1.5リットルを基準とし、28℃以上の気温が予想される日は、1株当たり2リットルとする。
- (4) 30℃以上の高温が予想される日は、通常のかん水では水分不足となるため、午後にも1回、1株当たり1リットル程度の追加のかん水を行う。
- (5) 2本仕立て苗の場合は、1株当たりのかん水量は1本仕立て苗の2倍量とする。
- (6) 1回当たりの追肥量は、窒素成分0.5kg/10a以内とし、10日間の窒素成分の合計2.0～2.5kg/10aを目安とする。3日以上日照不足が続く場合は水量を1～2割減、肥料を1割減とする。また、草勢に応じて追肥量を調整する。

〈早植えの作型 かん水と追肥量の目安〉 ( )は2本仕立て苗

月	旬	かん水量/1株当たり	かん水間隔	10日間の窒素成分合計
7	上～下	1.5～2.2 $\frac{\text{リットル}}{\text{株}}$ (3.0～4.4 $\frac{\text{リットル}}{\text{株}}$ )	毎日～1日おき	2.0～2.5kg/10a

※りんか409はかん水量は1割程度多くする。

#### 2 葉面散布

草勢の維持や葉先枯れ、ガク枯れ、落花を予防するため、メリット黄 400倍を各段週2回程度、開花花房を中心に葉面散布する。

#### 3 高温対策

- (1) 高温による各種障害が発生しやすい時期となるため、被覆遮光資材や塗布遮光資材等を活用して、ハウス内の温度をできるだけ下げる。
- (2) 終日遮光を行う場合の被覆資材の遮光率は、両面を遮光する場合は20～25%、片面を遮光する場合は30%前後が適する。
- (3) 塗布遮光資材は、資材により効果の期間が異なるので、確認して使用する。塗布の際、無風で屋根に露がない時間帯に南側または西側の片面に散布する。
- (4) 通路かん水を7月中旬頃からは、おおむね7～10日間隔で行う。急激な吸水による軟果防止のため1回目は1,000 $\frac{\text{リットル}}{\text{10a}}$ をかん水し、2～3日後から本格かん水と追肥を実施する。

本格かん水の1回当たりのかん水量は3,000～4,000 $\frac{\text{リットル}}{\text{10a}}$ 程度、追肥は1回当たり窒素成分で0.5kg/10a程度とする。

## 4 病害虫防除

- (1) 曇雨天が続くと灰色かび病や葉かび病が発生しやすくなるので、予防防除に努める
- (2) 高温乾燥でアザミウマ類、アブラムシ類、オオタバコガ、トマトキバガの発生が多くなるので、早期発見・早期防除を徹底する。

## ◆メロン◆

### 1 ネット発生後の管理

ネット発生以降は、最高気温 28～30℃ 最低気温 15～18℃を目安に管理する。  
ネット完成時は換気を十分に行い、日中しおれない程度にやや乾燥気味の管理とする。  
草勢をみながら、3～5日おきに3回程度、葉面散布を行う。

		N-P-K
(例)	青……生育促進、葉色改善	(7-5-3)
メリット	黄……着果促進、果実肥大	(3-7-6)
	赤……成熟促進、徒長抑制、花芽分化	(0-10-9)

最低気温が20℃以上になると糖度が上がりにくくなるため、外気の最低気温が15℃以上ある場合、夜間にトンネルを開放する。

### 2 収穫

収穫は、着果後の日数、外観の変化、試食などにより総合的に判定する。

タカミの場合、①結果枝の葉が徐々に枯れる、②果皮が濃緑から黄緑色に変わる、③へたの周囲が突起し、離層が形成されるといった兆候が見られるので収穫期の判定基準とする。

### 3 果実の生理障害

#### (1) 裂果

裂果は、果実肥大時、果肉の肥大に果皮の伸びが追いつかなくなり発生するが、「着果から鶏卵大前までの時期」「ネット形成期」「収穫期」の3つのステージで危険性が高い。

特に、収穫期の裂果は、開花後40日頃までの期間の乾燥・低温により肥大が抑えられた後の成熟期の潤沢な養水分吸収によって発生する。また、多肥や未熟な堆きゅう肥の施用で収穫期に草勢が強まった場合も発生する。

対策は、カルシウム剤の葉面散布や下葉・徒長枝の除去により急激な肥大を抑える。

#### (2) 発酵果

窒素・カリ過多、カルシウム不足、高温・照り込みによる草勢の低下、ホルモン処理の着果、低温・乾燥による初期肥大の抑制などにより発生する。

対策は、カルシウム剤の葉面散布や遮光を行う。

#### (3) 腐敗果

原因は、病原菌と生理障害の2つがある。

対策は、病原菌の場合は薬剤散布による予防、生理障害の場合は発酵果と同様の対

策を行う。

## 花 き

換気や遮光をこまめに行うなど、施設内の温湿度管理を徹底しよう！  
病害虫の早期発見・早期防除に努めよう！

### ◆キ ク◆

#### 1 今後の作業

輪ギクの芽かきは、時期が遅れると摘み取った後の傷が大きくなるので早めに行い、摘蕾は、小豆大の頃に中心の蕾を残して行う。

#### 2 病害虫防除

白さび病予防のため定期的に異なる系統の薬剤をローテーション散布する。  
また、ハダニ類、アザミウマ類、ヤガ類が発生しやすい時期なので、早期発見、早期防除に努める。ハウスのサイドや出入口等への防虫ネット設置のほか、ほ場周辺の除草も行い、病害虫をほ場に侵入させないように努める。

### ◆トルコギキョウ◆

#### 1 今後の作業

十分な換気に努め、可能な限り施設内の温度を下げる。好天が続く場合、短期間遮光（遮光率 30～40%）し、施設内の急激な温度上昇を防ぐ。

かん水は、発蕾期からは徐々に控える。

地際から 20cm くらいまでの側枝や主茎の頂花蕾（1 番花）は、発生したら早めに除去する。また、出荷時に不要となる蕾も早めに除去する。

#### 2 病害虫防除

上記キクを参照

《ツキノワグマ出没警報発令中！！（4月20日～11月30日）》

農作業は、1人での作業を避け、「ラジオやクマよけスプレーを携帯する」、「食べ物や空の容器はすぐに片付ける」、「農作物残渣は適正に処理する」など、人身被害の防止に努めましょう。

6～8月は「農薬危害防止運動」実施期間です  
農薬の適正使用と隣接農地への飛散防止に十分気をつけましょう

- 使用し残った農薬などは、河川等へ絶対捨てないでください。
- 農薬を使用する場合には、必ず最新の「農薬登録情報」を確認してください。
- 農薬は鍵のかかる専用の場所に保管し、管理を徹底しましょう。

農作業中の熱中症に注意しましょう  
～熱中症は適切な予防をすれば防ぐことができます～

- 天候の変化が激しい時期ですが、高温が予想される日は、熱中症予防を忘れないようにご注意ください。
- 暑さの感じ方は人によって異なります！高齢の方は特に注意が必要です。
- 周りが協力して、熱中症予防を呼びかけ合うことが大切です。

青の煌めきあおもり国スポ・障スポ

2026

翔ける未来へ縄文の風に乗って  
第80回国民スポーツ大会 第25回全国障害者スポーツ大会



国スポ本大会

2026年 10月10日 土 ～ 10月20日 火

障スポ

2026年 10月23日 金 ～ 10月26日 月